

二〇二四年 第三回 名大本番レベル模試 国語

解答・採点基準

全3問 105分 200点満点

一 (80点)

〈現代文 納富信留『世界哲学のすすめ』〉

解答

問一	a	コヨミ	b	融合	c	叙述	d	シャバ
	e	カクセイ	f	セイキ	g	活躍	h	噴出
	i	カナタ	j	膨張				

問二 身体と外部との間で成立する一面的な「現れ」を身体の動きと心によって総合することとで、長い時間にわたって可能性が開かれたより広い世界を経験すること。  
(七五字)

問三 過去に多くの人が経験し表現した事柄を共有し、一定の方式の言説化を迫体験する仕方とで、一緒に生きる他人や他の事物を含む世界を理解すること。(七〇字)

問四 同じ「今」を生き、「同時代」の経験を持つ人々の生の営みが刻み込まれているために、均質に続く時間の流れではなく、それぞれに異なる特徴を示しながら、積み重なって重層的な「世界」を形作っていくもの。(九六字)

問五 空間的に限定された私の身体を超えて世界という地平へと拡大し、「今」を共に生きる人類の営みが刻み込まれた「世」のそれぞれを「永遠」の像の一部として眺望する、時間の流れを超えた別の次元の全体性を持つもの。(二〇〇字)

問六 ア・エ

## 採点基準

- ▼ 採点に際しては、必ず解説を参照して、許容される解答を確認すること。
- ▼ 小問ごとに、**加点法・減点法併用**で採点する。**0点**以下になった場合、その問は**0点**とする。
- ▼ 「X」という内容（**?点**）の項目は、答案全体がどのような文章構成であるかに関わらず、**答案の一部に要素Xが含まれているかどうかを判断する。**
- ▼ 「X1とX2がY」という**論理関係**になっていなければ、**?点減点**の項目は、**要素X1とX2が両方とも揃っている答案だけを判断の対象にする。**つまり、X1とX2のいずれかでも欠けている場合は、Yについての減点はしない（Yの欠けによって失点しているので、さらに減点する必要はない）。
- ▼ 各々の採点項目について、**マルかバツかの二択で判断すること。**誤字脱字以外の部分点は原則として認めない。

### 問一 各2点 計20点

a	ココミ	b	融合	c	叙述	d	シャバ	e	カクセイ
f	セイキ	g	活躍	h	噴出	i	カナタ	j	膨張

\* 部分点なし。

\* 読みをカタカナ以外で解答している場合、全体として**1点減点**し、残りは通常採点する。

### 問二 10点満点

1. 身体と外部との間で成立する**一面的な「現れ」**、という内容（**3点**）

\* 「一面的」という限定がない場合は、**1点減点**。

2. 1（一面的な「現れ」）を**身体の動きと心によって総合する**、という内容（**3点**）

3. 2によって、**長い時間にわたって可能性が開かれたより広い世界を経験する**、という内容（**4点**）

\* 「より広い（より大きい）世界」などの限定がない場合は、**1点減点**。

\* 「経験する」は「生きる」などの表現も可。

\* 解答字数が**八〇字以内**に収まっていなければ、**0点**。

\* 「現れ」などの**鉤括弧の有無は問わない**。

問三 10点満点

1. 過去に多くの人が経験し表現した事柄を共有する、という内容(3点)
  2. 一定の方式の言説化を体験する、という内容(3点)
  3. (1・2の仕方で)一緒に生きる他人や他の事物を含む世界を理解する、という内容(4点)  
\* 「理解する」は「経験する」「生きる」などの表現も可。
- \* 解答字数が七〇字以内に収まっていなければ、0点。

問四 15点満点

1. 人々は同じ「今」を生き、「同時代」の経験を持つ、という内容(4点)
  2. 「世」には人々の生の営みが刻み込まれている、という内容(4点)
  3. 「世界」は均質に続く時間の流れではない、という内容(2点)
  4. 「世」はそれぞれに異なる特徴を示しながら、積み重なって重層的な「世界」を形作る、という内容(5点)  
\* 「世界」はそれぞれに異なる特徴を示す「世」が積み重なっている」などの表現も可。
- \* 解答字数が一〇〇字以内に収まっていなければ、0点。
- \* 「世」「世界」などの鉤括弧の有無は問わない。

問五 15点満点

1. 世界という地平を拡大していく、という内容(3点)
  2. 空間的に限定された私の身体を超える、という内容(3点)
  3. 「今」を共に生きる人類の営みが刻み込まれた「世」、という内容(3点)
  4. 「世」のそれぞれを「永遠」の像の一部として眺望する、という内容(3点)  
\* 「世」は「今」という表現も可。
  5. 「永遠」の説明として、時間の流れを超えた別の次元の全体性、という内容(3点)  
\* 解答字数が一〇〇字以内に収まっていなければ、0点。
- \* 「世」「世界」「今」「永遠」などの鉤括弧の有無は問わない。

問六 各5点 計10点

ア、エ

- \* 部分点なし。
- \* 解答数が二つ以下の場合、通常採点(加減式)。解答数が三つ以上の場合、間違い一つにつき、2点減点。選択肢全てを記載している場合は0点。

二 (60点)

古文 『建礼門院右京大夫集』

解答

問一 作者と同様に、平家の人を恋人としていて、その恋人を戦乱で亡くすという、夢のように現実味の欠けた(あっけない)悲しみを味わっている人。

問二 (ア)昔も今もただ心穏やかな死別はよくあるが、このように恋人を戦乱で亡くすという、つらいことはいつあったか、いや、今までになかったとばかり思うのももつともなこと

(イ)さまざまに気持ちばかり亡き資盛を弔うのも、また人目が憚られるので、親しくない人には弔いのことは知らせず、自分の心だけで仏事を営む悲しさも、やはり堪え難い

(ウ)そうとはいえ、目に入る資盛の手紙に残された筆跡や言葉などは、このように亡くなった人の手紙ではなくてさえ、昔の筆跡は昔が偲ばれて涙がかかるのが習わしであるのに

問三 (A)忘れようと思っても、また逆に、あの人の思い出が跡形なくなるようなことは悲しい

(B)悲しさがますます引き起こされる、亡きあの人の筆跡はかえって消えてしまえと思う

問四 生前、資盛が手紙で後世の弔いを作者に言ってきた。その弔いをする縁者もいるだろうが、平家に縁のある人は立場上、大っぴらにそんなこともできないだろうからと思って、弔いをするにしたら作者は、資盛からの手紙の反古を利用して、経典や地藏六体や尊勝陀羅尼を書いて、阿証上人に依頼して供養を行った。

## 採点基準

▼ 採点に際しては、必ず解説を参照して、許容される解答を確認すること。

▼ 小問ごとに、減点法で採点する。0点以下になった場合、その問は0点とする。

▼ どの設問も解答欄からはみ出て書いてある場合は、その設問は0点。

### 問一 6点満点

1. 「同じゆかり」の明示として、「作者と同様に平家の人を恋人としていた」という内容がなければ、2点減点。

2. 「同じゆかり」の明示として、「恋人を戦乱で亡くした」という内容がなければ、2点減点。

3. 「夢見る人」の比喩の説明として、「夢のように現実味がない、あつけない悲しみを味わっている人」という内容がなければ、2点減点。

\* 「悲しみ」は必須としない。実質的に夢を見ているように内容を取っているものは不可。比喩の言わんとしていることの明示として「現実味がない、あつけない」などが無い場合は、1点減点。

### 問二 計30点

#### (ア) 10点満点

1. 「昔も今もただのどかなる限りある別れこそあれ、」を「昔も今もただ心穏やかな死別はよくあるが、」の意味に訳していなければ、2点減点。

\* 「限りある別れ」を、「死別」の意で訳していなければ、1点減点。

\* 「こそあれ、」を、逆接で訳していなければ、1点減点。

\* 「のどかなる」はそのまま「のどかな」でも可。

2. 「かく憂きことはいつかはありける」を「このようにつらいことはいつかあったか、いや、今までになかった」の意味に訳していなければ、2点減点。

\* 「憂きこと」を「つらいこと」などと訳していなければ、1点減点。

\* 「いつかはありける」を、「いつあったか、いや、なかった」など反語で訳していなければ、1点減点。過去の「ける」も訳していなければ、1点減点。「いつあったのだろうか」など、推量の訳があっても可。

3. 「かく憂きこと」の「かく」を「恋人を戦乱で亡くすという」などと補っていないければ、2点減点。

\* 「このように」を明示して訳していなくても可。

4. 「このみ思ふもさることにて」を「とばかり思うのももつともなことで」などと訳していないければ、4点減点。

\* 「のみ」を限定や強調の意で訳していなければ、1点減点。

\* 「思ふも」を「思うのも」など、「さることにて」の主語として訳していなければ、**1点減点**。

\* 「さることにて」を「もったもなことで」などの意で訳していなければ、**2点減点**。

(イ) **10点満点**

1. 「さまざまに心ざしばかりとぶらふも」を「さまざまに気持ちばかり亡き資盛を弔うのも」などと訳していなければ、**4点減点**。

\* 「心ざしばかり」を「気持ちばかり、気持ち程度」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「とぶらふも」を「人目つつまし」の主語として訳していなければ、**1点減点**。

\* 「とぶらふ」を「資盛を弔う」と言葉を補って訳していなければ、**2点減点**。「とぶらふ」ができているのを前提に「資盛を」という補いを見る。つまり、「とぶらふ」の訳語が誤っていて、「資盛を」という補いがあるという場合は、不可。

2. 「また人目つつましければ」を「また人目が憚られるので」の意味に訳していなければ、**1点減点**。

3. 「疎き人には知らせず」を「親しくない人には弔いのことは知らせず」などと訳していなければ、**2点減点**。

\* 「疎き人」を「疎遠な人、親しくない人」などと訳していなければ、**1点減点**。「疎い人」は不可。

\* 「知らせず」の目的語として「弔いのことを」などと言葉を補っていなければ、**1点減点**。

4. 「心ひとつに営む悲しきも」を「自分の心だけで仏事を営む悲しきも」などと訳していなければ、**2点減点**。

\* 「心ひとつに」を「自分の心だけで」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「営む」を「仏事を営む」「仏事を行う」「供養をする」などと訳していなければ、**1点減点**。

5. 「なほ堪へがたし」を「やはり堪え難い」などと訳していなければ、**1点減点**。

(ウ) **10点満点**

1. 「さすがに見ゆる筆の跡、言の葉ども」を「そうとはいえ、目に入る筆跡や言葉などは」などと訳していなければ、**3点減点**。

\* 「さすがに」を「そうはいうものの、そうとはいえ」などと訳していなければ、**1点減点**。「そう」の指示語を「見るまいと思う」などと具体化してあっても可。

\* 「見ゆる」を「目に入る、目に映る、見える」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「筆の跡、言の葉ども」を「筆跡や言葉など」と訳していなければ、**1点減点**。主格の助詞「は」はなくても可。ただし、「ども」の複数の訳がない場合は不可。

\* この箇所本文の構成が「筆跡や言葉などがそうとはいえ、目に入り」などと語順の入れ替えをされていても可。

2. 「筆の跡、言の葉ども」について「資盛の手紙に残された」などの言葉の補いがなければ、**1点減点**。

3. 「かからでだに」を、言葉を補いつつ「このように亡くなった人の手紙ではなくてさえ」などと訳していなければ、**3点減点**。

\* 「で」を「なくて」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「だに」を「さえ」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「かから」の指示語の具体化として、「亡くなった人の手紙で」などと補っていないければ、**1点減点**。「このように」の訳語はなくても可。

4. 「昔の跡は涙のかかるならひなるを」を、言葉を補いつつ「昔の筆跡は昔が偲ばれて涙がかかるのが**習わしであるのに**」などと訳していなければ、**3点減点**。

\* 「昔の跡」を「昔の筆跡」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「涙のかかる」の理由として「昔が偲ばれて」など懐旧のことが書かれていなければ、**1点減点**。

\* 「ならひ」を「習性、世の常、習わし」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「なるを」を断定「なり」＋逆接（もしくは順接）を「で」訳していなければ、**1点減点**。

問三 計12点

(A) 6点満点

1. 「忘れむと思ひてもまた」を「**忘れようと思つても、また**」などと訳していなければ、**1点減点**。

2. 「立ち返り」を「**逆に**」もしくは「**折り返し、すぐに**」などと訳していなければ、**2点減点**。

3. 「なごりなからむことぞかなしき」を「**思い出が跡形なくなるようなことは悲しい**」などと訳していなければ、**2点減点**。

\* 「なごりなし」は「跡形なく忘れる、全てにわたって忘れる」などでも可。

\* 婉曲「む」は省略されていても可だが、「くなるだろうこと」といった推量の訳は不可とする。

4. 「忘れむと」もしくは「なごりなからむ」の箇所で、「**あの人を、あの人**」などといった補いがなければ、**1点減点**。

\* 「あの人」は資盛と具体的に示してあってもよい。

\* 丁寧語で「～です・ます」を加えて訳してあっても可。

(B) 6点満点

1. 「かなしさのいともよほす」を「**悲しさがますます引き起こされる**」などと訳していなければ、**2点減点**。

\* 「いとど」を「ますます、いっそう、一段と」などと訳していなければ、**1点減点**。  
\* 「水茎の跡」が「悲しき」を引き起こす、という関係が正しく訳に反映できていなければ、**1点減点**。

2. 「水茎の跡は」を、言葉を補いつつ「あの人の筆跡は」などと訳していなければ、**2点減点**。

3. 「なかなか消えねとぞ思ふ」を「かえって消えてしまえと思う」などと訳していなければ、**2点減点**。

\* 「なかなか」を「かえって、いっそ」などと訳していなければ、**1点減点**。

\* 「消えね」の「ね」を完了の命令形として訳していなければ、**1点減点**。完了の訳としては「確かに、必ず、きっと」も可とする。

\* 丁寧語で「くです・ます」を加えて訳してあっても可。

#### 問四 1・2点満点

1. 追善供養仏事を行うに至る発端として「生前、資盛が手紙で後世の弔いを作者に言ってきた」という内容がなければ、**3点減点**。

2. 追善供養仏事を行うことに伴う逡巡から決意への説明として「その弔いをする縁者もいるだろうが、平家に縁のある人は立場上、大っぴらにそんなこともできないだろうからと違って、弔いをすることにした」という内容がなければ、**5点減点**。

\* 本文「またおのづから残りて、あととふ人もさすがあるらめど、よろづあたりの人も世に忍び隠ろへて、何事も道広からじ」と「思ひを起こして」の箇所に基づく記述になっているかを見る。この項目を三分し、それぞれ減点項目を細分化すれば、以下の通り。

\* 「その弔いをする縁者もいるだろうが」（「あととふ人もさすがあるらめど」という内容がなければ、**2点減点**。

\* 「平家に縁のある人は立場上、大っぴらにそんなこともできないだろうからと違って」（「よろづあたりの人も世に忍び隠ろへて、何事も道広からじ」という内容がなければ、**2点減点**。

\* 「弔いをすることにした」（「思ひを起こして」という内容がなければ、**1点減点**。

3. 追善供養仏事の実際の行いの説明として「資盛からの手紙の反古を利用して、経典や地藏六体や尊勝陀羅尼を書いて、阿証上人に依頼して供養を行った」という内容がなければ、**4点減点**。

\* こちらも減点項目を細分化すれば、以下の通り。

\* 「資盛からの手紙の反古を利用して」仏事をなしたという内容がなければ、**1点減点**。

\* 仏事の内容として「経典書写」「地藏六体の墨書き」「尊勝陀羅尼書写」を一つも書けていない、一つしか書けていない場合は、**2点減点**。二つのみ書けている場合は、**1点減点**。

\* 仏事を「阿証上人に依頼して」行ったという内容がなければ、**1点減点**。



三 (60点)

〈漢文 欧陽脩「伶官伝叙論」〉

解答

問一 a ああ b や c よる

問二 梁・燕王・契丹

問三 父の遺言を忘れないよう、先祖の廟堂に父から与えられた矢を納め、戦時にはその廟堂に供物を捧げて矢を受け取り、その矢を背負って先陣を切り、戦勝時には廟堂にその矢を奉納し、ついに父が遺恨を残した敵だと述べた燕王父子と梁に対し仇を返すことを果たした。

問四 天に誓ひ(い)髪を断ち、泣下りて襟を沾すに至る

問五 満ち足りて驕り高ぶることは損害を招き寄せ、謙虚でいることは利益を享受させる

問六 国の盛衰は天命というより人の行いにより起こるもので、後唐の荘宗が滅亡したのも数十人の楽人への寵を専らにしたためである。国を滅ぼす災いはそのような小さなこととの積み重ねで起こり、どんな智勇のある人も溺愛したものに苦しめられるものなので、その一例として、楽人の伝記を書くことで、後世への戒めとしようとした。(一五〇字)

## 採点基準

▼ 採点に際しては、必ず解説を参照して、許容される解答を確認すること。

▼ 小問ごとに、減点法で採点する。0点以下になった場合、その問は0点とする。

▼ どの設問も解答欄からはみ出て書いてある場合は、その設問は0点。

問一 計9点

a ああ 3点満点

b や 3点満点

c よる 3点満点

\* いずれも部分点なし。

問二 6点満点

梁・燕王・契丹

\* 順不同でも可。

\* 「仇である梁」「晋王が擁立したのに仇の梁に帰した燕王」「兄弟の契りを結んだのに仇の梁に帰した契丹」など、説明して書いてあっても可。ただし、解答欄からはみ出ていたら、それぞれについて2点減点。

問三 14点満点

1. 「父の遺言を忘れないよう、先祖の廟堂に父から与えられた矢を納め」などという内容がなければ、5点減点。

\* 「廟」が先祖の霊を祭ったものだということが読み取れなければ、2点減点。

\* 「廟」に矢を納めたのが、「父の遺言を忘れない」ため、もしくは「父の遺言を守ることが誓う」ためなど、遺言との関係がわかる記述がなければ、1点減点。

2. 「戦時にはその廟堂に供物を捧げて矢を受け取り、その矢を背負って先陣を切り」などという内容がなければ、4点減点。

\* 「供物を捧げて矢を請い取」ったという内容がなければ、2点減点。

\* 「矢を背負って先陣を切」ったという内容がなければ、2点減点。

3. 「戦勝時には廟堂にその矢を奉納し」などという内容がなければ、2点減点。

4. 「ついに父が遺恨を残した敵だと述べた燕王父子と梁に対し仇を返すことを果たした」などという内容がなければ、3点減点。

\* 仇敵に対し、雪辱を果たしたという内容がなければ、2点減点。

\* 仇敵が燕王父子・梁だということが読み取れなければ、1点減点。

問四 6点満点

1. 「至<sub>二</sub>」(沾)「<sub>レ</sub>」を「<sub>一</sub>」(沾す)に至る」と書き下していなければ、2点減点。
2. 「誓<sub>レ</sub>天断<sub>レ</sub>髪」を「天に誓ひ(い)髪を断ち」と書き下していなければ、2点減点。
3. 「泣下<sub>レ</sub>沾<sub>レ</sub>襟」を「泣下りて襟を沾す」と書き下していなければ、2点減点。

\* それぞれの項目ごとに、部分点なし。

\* 現代仮名遣い・歴史的仮名遣いどちらで表記されてあってもよい。また、読点の有無は不問。

問五 5点満点

1. 「満」を「自己満足」「驕り高ぶる」「慢心」などと訳していなければ、2点減点。

\* 「慢心が」と名詞主語で取ってあっても、「慢心すると」と動詞として仮定で取ってあっても、不問。単純に「満足」と訳してあるものは、不可。

2. 「招<sub>レ</sub>損」を「損害を招き寄せ」「損害をもたらし」などと訳していなければ、1点減点。

\* 「招」の訳は広く許容。「損」はそのまま「損(そん)」の訳は不可。「損失、損傷、損害」あるいは「不利益」などをよしとする。「招損」で「損なわれ」は可。

3. 「謙」を「謙虚」「謙遜」などと訳していなければ、1点減点。

\* 「満」と同様に、名詞主語での訳も動詞仮定での訳も可。

4. 「受<sub>レ</sub>益」を「利益を享受させる」などと訳していなければ、1点減点。

\* 表現は、日本語としておかしくなければ、広く許容。

問六 20点満点

1. 「国の盛衰は人の行いにより起こる」などという内容がなければ、2点減点。

\* 「人事」の解釈が「人事」のままでも可。

2. 1の実例として「後唐の莊宗が滅亡したのも数十人の楽人への寵を専らにしたためである」などという内容がなければ、6点減点。

\* この例での「人事」＝「数十人の楽人への寵愛」だということが示されていないければ、3点減点。

3. 「禍患は忽微に積み、而して智勇は多く溺るる所に困しむ」の解釈として「国を滅ぼす災いは小さなことの積み重ねで起こり、どんな智勇のある人も溺愛したものに苦しめられるものであるなどという内容がなければ、6点減点。

\* 解釈の誤り、また言及不足や欠落があることに2点減点。

4. 伶官伝述作の動機として、3の「一例として、楽人の伝記を書くことで、後世への戒めとしようとした」などという内容がなければ、6点減点。

\* 「伶官伝」が3の一例だという内容がなければ、3点減点。ただし、「一例として」は、「は楽人に限らない」などという記述があれば、よしとする。

\* 「伶人」「伶官」をそのまま用いている場合は、全体で2点減点。

\* 「どのような動機があったからか」という問いに答える答え方になっていなければ、1点減

点。ただし、「くということ。」などの明らかな文末不備以外は広く許容する。

\* 解答字数が一五〇字以内に収まっていなければ、0点。